

張家山漢簡・史律に見える「史書」について

西 川 利 文

はじめに

張家山二四七号漢墓出土の「二年律令」と題される漢律群には、「史律」という篇（簡四七四～簡四八七）がある。^①この史律については、『漢書』卷三〇藝文志・小学条に見える蕭何のつくった律（以下、「蕭何律」とする）や、『説文解字』卷一五上の許慎序に見える「尉律」と類似する部分があることもあって、すでに多くの研究がある。^②そこでは一般的に、文献の内容を前提として、史律は書記官としての史に関連する律だと考えられているようである。^③

さて、史律には「史書」という語が見える。この語も文献史料に散見され、以前から研究対象となっており、史律の「史書」についても従来解釈を踏襲して、大篆や隸書といった書体や、あるいは『史籀篇』などの識字書だと解釈されることが多いようである。^④すなわち、史律および「史書」は、分析の手がかりとなる文献の記載の影響もあって、小学（文字学）との関連で考える傾向にあるようである。

しかし筆者は、前に史律の前半部分（簡四七四～簡四八〇）を中心に簡単な分析を行った結果、これらの解釈とは異なる結論を得た。すなわち史律は、書記官の養成に関するものではなく、奉常（太常）所属の太史・太卜・太祝に属する史・卜・祝という専門職の属吏を養成する制度であり、それが教育制度と属吏養成制度が一体になった

規定であることから、前漢武帝期に創始される博士弟子制度（「功令」）の先蹤をなす律だと考えた。そして「史書」についても、これが「十五篇」「卜書」「祝十四章」などとともに、史・卜・祝の候補者たる各「学童」の卒業試験の一つとして示されていることから、前稿では具体的内容の分析を保留したものの、史・卜・祝といった専門職養成のための教育内容と直結する書物だと考えたのである。⁽⁵⁾

このような解釈はかなり特異なものにも見えるが、先行研究の中にも、筆者のような観点からの史律の分析の可能性を示唆する指摘もある。まず、書記官としての史の分析を主としつつも、史律の史・卜・祝に祭祀関係の専門職の側面を指摘する曹旅寧氏の研究などがある。⁽⁶⁾これは、史律段階から『漢書』藝文志と『説文』序に採録されるまでの間に、律文の性格が変化した可能性を示唆する。

また「史書」についても、文献史料の事例の中に一概に書体や識字書とは解釈できない記事もあることから、従来からこれを官府で作成する文書を意味すると考える研究があり、臧知非氏はこの解釈を史律の「史書」にも適用した。⁽⁸⁾一般的な「史書」の解釈は、『漢書』藝文志や『説文』序の記載に基づいた注を出発点にしているが、臧氏らの指摘は、それに納まりきらない「史書」の例が存在することを明らかにしている。これには、汪桂海氏らが指摘するように、時期による「史書」の意味内容の変化の可能性もある。⁽⁹⁾また文献史料には、前漢後半期以降の「史書」の記事しか見えず、史律と同時代の例はないことから、史律独自の意味内容を含む可能性もある。いずれにしても、漢代の「史書」は多義的なようである。

以上のことからすると、筆者の立場を補強するためにも、史律から「蕭何律」・「尉律」への性格の変化を、さらに追究する必要がある。その際の一つの手がかりとして本稿では、「史書」に焦点を当て、文献史料での「史書」の使用例を分析しつつ、それが史律の「史書」に適用できるか否かを分析することを中心に置きたい。このような作業を行えば、恐らく史律の性格がより一層明らかになると期待される。

一、文献史料に見える「史書」に対する注

はじめに触れたように「史書」の語は、『漢書』『後漢書』などの文献史料に散見されるものの、早くからその内容が不明確になっていたのか、後漢後半期からいくつかの注が施される。これらの注が、現在の「史書」に対する理解の拠り所ともなっており、ここでは、新たな理解の可能性を見つけるためにも、文献に施された注の内容を確認して、その解釈の妥当性を検討しよう。

まず、一般的理解の出発点となり、しかも「史書」に対する最も早い時期の注である後漢の応劭の説を確認しておこう。応劭は『漢書』卷九元帝紀贊の「元帝、多材藝、善史書」という記事に、

周宣王太史籀所作大篆（周宣王の太史・史籀作る所の大篆）。

と注する。この「大篆」は一般には書体と考えられ、錢大昕は『三史拾遺』卷二においてその解釈を批判して、

応説非也。……蓋史書者、令史所習之書、猶言隸書也。善史書者、謂能識字作隸書耳。豈皆尽通史籀十五篇乎

（応説非なり。……蓋し史書なる者は、令史の習う所の書、猶お隸書を言うがときなり。史書を善くするとは、能く字を識り隸書を作すを謂うのみ。豈に皆な尽く史籀十五篇に通ずるや）。

と述べ、「史書」を同じ書体でも「隸書」と見る。さらに、理由はもう一つ不明な点もあるが、同じく「隸書」とする段玉裁の解釈もある。⁽¹⁰⁾ 現在では、この「史書」「隸書」説が有力のようである。

これに対して、もう一つ有力な説として「史書」を識字教科書とする唐の李賢の解釈がある。彼は、『後漢書』紀五安帝紀および紀一〇皇后紀・和熹鄧皇后条の二箇所に同じ内容の注を施すが、ここでは後者の注を掲げておこう。鄧皇后の「六歲能史書、十二通詩・論語」という記事に、

史書、周宣王太史籀所作大篆十五篇也。前書曰、教学童之書也（史書は、周宣王の太史籀の作る所の太篆十五

篇なり。前書曰く、学童を教うるの書なり、と。⁽¹⁾

と注し、李賢は、「史書」を周の太史・籀の著した『大篆』（『史籀篇』）という、学童用の教科書だと見る。応劭と李賢がともに基づいた『説文』序と『漢書』藝文志の記載を見る限り、こちらの「史書」識字書説の方が妥当のように思われる。次にその記載を掲げて確認しよう。

『説文』序には

及宣王大史籀著大篆十五篇、与古文或異（宣王の大史籀、大篆十五篇を著すに及び、古文と或いは異なる）。

とあり、この「大篆」は明らかに書名である。一方『漢書』藝文志では、目録部分の『史籀』十五篇に対する班固の自注に、

周宣王太史作大篆十五篇、建武時亡六篇矣（周の宣王の太史、大篆十五篇を作る。建武の時、六篇を亡う）。とあり、さらに小学の系譜を述べた部分に、

史籀篇者、周時史官教学童書也、与孔氏壁中古文異体（史籀篇なる者は、周の時の史官、学童を教うるの書なり、孔氏壁中の古文と体を異にす）。

とある。班固自注の「大篆」は、書体の可能性もあるが、『史籀篇』の別名が『大篆』だと述べていると考える。そこでこの三つの記載を総合すると、周宣王の大史（だつた籀）が『大篆』を著し、それが『史籀』ないし『史籀篇』とも呼ばれ、周の史官が学童を教育するための書物だった。そしてそれは、古文体とは異なる書体（大篆）で記され、後漢の建武年間には一五篇のうち六篇を欠いていたということになろう。従って、「大篆」というのは本来書名としての『大篆』であり、そこに記される書体が他の書物の書体と違っていたことから、その書体も「大篆」と呼ぶようになり、一方で書名は著者の名をとって『史籀篇』と俗称されるようになったのではなからうか。

そうすると、李賢注はいうに及ばず、応劭の注も、「史書」を『大篆』という書物として捉えていた可能性が高く、

それを清朝の学者が書体と誤解したのではなからうか。

ところで、ここで注目しておきたいのは、右に引いた『説文』序および『漢書』藝文志の記載には「史書」への言及がないことである。確かに、「蕭何律」には「尚書御史史書令史」とあって「史書」の語が見えるが、これを「大篆」や「史籀」と直ちに結び付けることはできない。その中であえて「史書」との関連を見出そうとすれば、『漢書』藝文志の『史籀篇』に対する説明として、「周時史官教小学童（周の時代に史官が小学童を教えるために使った書物である）」と記している点であらうか。傍点を付した部分に注目すれば、「史の書」すなわち「史書」と考へることも可能である。これ以外に、前掲の記事から「史書」との関係を推測できる記事はなく、書体説でも識字書説でも、根拠はきわめて不明確だといわざるを得ないのである。

それでは、これ以外に解釈の余地はないのだろうか。その手がかりとなる注が、いくつか存在する。まず『漢書』藝文志の「尚書御史史書令史」の箇所に、

史書、今之太史書也（史書とは、今の太史の書なり）。

と注する臣瓚の解釈がある。この「太史書」が何を意味するか解釈が分かれるだろうが、太史で使用する専門書を意味するのであれば、はじめに示した筆者の解釈と近いといえるかもしれない。

そしてもう一つ、『資治通鑑』卷二七・宣帝甘露元年（前五三）条に見える楚主の侍者・馮嫪に関する「能史書、習事」という記載について、

史、吏也。史書、猶言吏書也（史は、吏なり。史書は、猶お吏書を言うがごときなり）。

と注して、「史書」＝「吏書」と解する胡三省の説がある。この「吏書」が何を意味するか不明な点もあるが、臧知非氏は官吏の使用する文書の形式だとい¹³う。

この馮嫪の記事は、仕えていた楚主解憂の使者として漢から正式に派遣された彼女が、「史書」に堪能で国内外

の諸事に通じていたので、西域諸国から尊敬されたという⁽¹⁴⁾。そうするとこの「史書」Ⅱ「史書」は、西域諸国の信任を得る能力ということになり、臧氏のような解釈も可能だと考えられる。筆者も文献の記載内容から見て一定の合理性があると考ええる。

以上のように、書体説でも識字書説でも、その根拠となる記載から「史書」Ⅱ「大篆」の関係を直接には語れず、さらに別の解釈も可能であるとすれば、文献に散見する「史書」の事例を一般的解釈以外の解釈ができないか、もう一度点検してみるのも無駄ではあるまい。そこで次に、史律の内容、そしてそれと類似する点のある『漢書』藝文志の「蕭何律」および『説文』序の「尉律」の内容を確認し、各律文間の類似点と相違点、そして「史書」の位置づけを中心に確認することにしよう。

二、史律の「史書」

最初に、史律の内容から確認しておこう。なぜなら、「史書」解釈の出発点にある『漢書』藝文志・『説文』序は、いずれも小学（文字学）に関するもので、そこから出発すれば「史書」の解釈も、小学との関連でしか考えられなくなってしまうからである。このような先入観を排除するために、史律の内容を先に確認しておくのが妥当だろう。また、張家山漢簡は前二世紀前半の前漢初期のものであり、後漢前半期（一世紀末～二世紀初頭）に成立する二つの文献とは、三〇〇年近い隔たりがある。その両者に類似の内容が含まれるとしたら、分析の方法としては、成立の遅い文献の内容を前提に史律を考えるのではなく、先に記された史律の内容の分析を行い、その結果から文献の内容を再検討するのが妥当である。このような順序で分析すれば、「史書」理解に対する新たな可能性が見えてくると予想される。

そこでまず、史律に分類される一四本の竹簡のうち、本稿の分析に直接かわる七本の竹簡（簡四七四～簡四八

○)を取り上げ、それをいくつか区切つて釈文と訳を示し、「史書」がどのように現われているのかを確認しよう。

〔A〕史・ト子、年十七歳学。史・ト・祝学童学三歳、学俱将詣大史・大ト・大祝、郡史学童詣其守、皆会八月朔日試之。(簡四七四)

〔史・トの子供は、一七歳になると(学童として)学びはじめる。史学童・ト学童・祝学童は三年学ぶと、学俱が(彼らを)ひきいて大史・大ト・大祝のもとにいたり、また郡の史学童は郡守のもとにいたり、いずれも八月一日に試験を受ける。〕

〔B〕試史学童以十五篇、能風(諷)書五千字以上、乃得為史。有(又)以八體(體)試之、郡移其八體(體)課大史。大史誦課、取(最)一人以為其県令/史。殿者勿以為史。三歳壹并課、取(最)一人以為尚書卒史。(簡四七五・簡四七六)

〔史学童を「十五篇」で試験し、それを五千字以上暗誦して書ければ、そこで(史学童は)史となることができる。さらに(史となった者を)「八体」で試験し、郡は八体の課(答案)を大史に送り、大史がすべての答案を評価して「誦課」、最優秀の者一人を出身の県の令史とする。最下位の者は史としてはならない(「資格を取り消す」。そして三年に一度、答案を総合評価し、その最優秀者一人を尚書卒史とする。〕

〔C〕ト学童能風(諷)書史書三千字、誦ト書三千字、ト六発中一以上、乃得為ト、以為官佐。¹⁶⁾其能誦三万以上者、以為ト上計六更。¹⁷⁾缺、試脩法、以六発中三以上者補之。(簡四七七・簡四七八)

〔ト学童は、「史書」三千字を暗誦して書き、「ト書」三千字を誦み、六回占って一回以上中てることができれば、そこでトとなることができ、彼らを官佐とする。(トとなった者)で三万以上を誦める者は、ト上計六更とする。(ト上計六更に)欠員が出れば、脩法に対して試験を行い、六回占って三回以上中てること

できれば任用する。」

〔D〕以祝十四章試祝学童、能誦七千言以上者、乃得為祝五更。大祝試祝、善祝・明祠事者、以為冗祝、冗之。⁽¹⁸⁾

(簡四七九)

〔祝十四章〕で祝学童を試験し、七千言以上を誦めた者は、そこで祝五更となることができる。大祝は祝たちを試験し、祝(祝詞)がうまく祠(祭祀)の事に明るい者を冗祝とし、「冗」の待遇とする。〕

〔E〕不入史・ト・祝者、罰金四兩、学侖二兩。(簡四八〇)

〔史・ト・祝となれなかつた者は罰金四兩、学侖は二兩。〕

ここに取り上げた史律の部分には、史・ト・祝の各学童の就学に関するものと、彼らが三年間の学習の後に受ける卒業試験、その結果による任用・昇進についての規定を記している。その中で「史書」は、ト(学童)に関する部分(〔C〕)に、「ト書」やト占の実技とともに、ト学童に対する試験科目として掲げられていることを確認しておきたい。すなわち「史書」は、「史」とあるにもかかわらず、史学童に対してではなく、ト学童に課されるものとして記されるのである。従つて史律の「史書」は、史(学童)が学ぶ「史の書」なのではない。その意味では「ト書」も、ト(学童)が学ぶ「トの書」と簡単に考えることもできない面もあるが、ここでは、史律の「史書」が史(学童)と直結しないということを、まず確認しておこう。

しかしこの「史書」を、史(学童)との関係で考えようとする研究も少なくはない。例えば史学童の試験科目である「十五篇」を『史籀篇』と結び付け、「十五篇」⁽¹⁹⁾『史籀篇』Ⅱ「史書」という関係を想定し、「十五篇」が「史書」と同一だとみなす研究もある。しかしこの発想は、『史籀篇』が「十五篇」から成り立っていたと記されて、篇数が一致することからくる推測であつて、それ以外に具体的な根拠があるわけではない。また前に述べたように、「史書」が必ずしも『史籀篇』を意味しないのであれば、「十五篇」と「史書」の関係は見出されなくなる。史律

においては、「史書」は卜学童が、「十五篇」は史学童が受験するもので、名称も異なるのだから、これを無理に關連付けるのではなく、別物と考えるのが妥当である。⁽²¹⁾

ちなみに、この「十五篇」はいくつかの区切り（篇）を持つ書籍を指すだろうし、祝学童に課される試験科目の「祝十四章」も、いくつかの「章」に分かれる書籍の形態だったと考えられる。そうすると、卜学童に課される「史書」や「卜書」も、ある種の書籍と考えるのが妥当なのではなからうか。少なくとも「史書」は、「諷」（暗誦）と「書」（筆記）によって試験が行われるのだから、「史書」が書体を意味するとなれば、それをどのように「諷」するのか理解に苦しむ。以上のことから、史律の「史書」は、書体を意味するのではなく、書籍の形態をしていたことだけは確実である。

史律は、史・卜・祝（および各学童）をそれぞれ個別に規定する一方で、「A」および「E」の部分に明確に現れるように、彼らを「史・卜・祝」と一括して扱っていることに注目しておきたい。これは、彼らの属していた大史・大卜・大祝が、「宗廟・儀礼を掌る」奉常（太常）の統括下にあつた（『漢書』卷一九百官公卿表）ことによるのだろう。すなわち史律は、奉常統括下の特定官府の属吏を養成する規定であり、そこで求められたのは、特定官府で働く属吏としての専門知識だったと考えられるのである。⁽²²⁾大史・大卜・大祝は、奉常のもとで祭祀関係の職務を分担して行つたが、その職掌を大雑把に言えば、大史が天文觀測・曆作成、大卜が卜筮、大祝が祝詞奉誦・神位の送迎ということにならうか。⁽²³⁾その最低限必要な知識が、史では「十五篇」、卜では「史書」「卜書」、祝では「祝十四章」という書籍に盛り込まれていたのだろう。そしてこれらが各学童に対する教科書として使われ、その習熟度を測つて一定の到達度に達した者を史・卜・祝として採用したのであろう。

中でも卜学童は、史律の冒頭に「史・卜の子」とあるように、史学童とともに親が卜の職にある者に限られていた。そのような者が、一七歳になつてはじめて学童となるのだから、それまで識字教育が行われなかったとは考え

にくい。しかも、さらに三年というかなり長期の学習期間を考えると、それぞれの専門教育に関する教科書（技術書）と考えるほうが妥当だと考える。従って史律の「史書」は、書体のみならず識字書でもなく、専門知識を修得するための教科書だったといえよう。²⁴

それでは、史律に掲げられる書物の内容はどのようなものだったのだろうか。それを具体的に明らかにできないが、『漢書』藝文志の分類でいえば、「皆な明堂・義和・史卜の職なり」といわれる「術数」類に入る書物なのではなからうか。ここには「史・卜」を中心に、古来の「史官」にかかわる書物が分類されているのである。²⁵「史書」も、このような書物の中に入るのだろう。この推測が妥当か否か、さらに検討が必要だが、ここでは可能性として指摘しておきたい。

以上のように史律は、史・卜・祝という専門職養成の規定であり、一般にいわれるような書記官一般としての史を養成する規定ではなかった。このような律が、なぜ史のみに特化するような「史律」と呼ばれるのだろうか。整理の誤りで、これら一群の簡牘が「史律」に含まれなかった可能性もなくはないが、現状ではこれらを「史律」に入れるのが妥当だろう。一方、右の『漢書』藝文志の術数の説明にも見えるように、史・卜および祝の三職を総称して「史官」と考えて「史律」とした可能性がなくもない。

ただもう一つ考えられる可能性として、書写者が本来の律名とは違う律名を付けたとも考えられる。張家山漢簡の出土した二四七号墓の墓主の地位については不明な点もあるが、²⁶郡府の属吏の地位にあり、必要な律を「二年律令」として書写したとしたならば、奉常管轄下の中央官府を中心にする律であるが、地方の郡府に所属する史の養成についても規定していることから、これを中心に置いて書写者が「史律」と題した可能性もある。このように考えれば、中央官府を中心とする史律が、地方の南郡地域の墓葬に入っていたことを説明できると考える。

史律を以上のように考えると、書記官の史の養成を規定したと考えられる『漢書』藝文志の「蕭何律」と『説

文』序の「尉律」とは類似する記事がありながらも、その性格をかなり異にするものといえそうである。そこで次に「蕭何律」および「尉律」の内容を確認して、史律との類似点と相違点を明らかにし、両者がどのような関係にあるのかを検討しよう。

三、「蕭何律」・「尉律」の記載内容の確認

まず、記載の中に「史書」の語が見える「蕭何律」の記事を、訳文とともに掲げておこう。

漢興、蕭何草律、亦著其法曰、太史試学童、能誦書九千字以上、乃得為史。又以六体試之、課最者、以為尚書御史史書令史。吏民上書、字或不正、輒舉劾²⁷。

〔漢が建国されると、蕭何が律を起草して、そこに次のような条文を入れた。「太史は、学童を試験し、（学童は）九千字以上暗誦して書ければ史とすることができる。さらに六体の試験を行い、最優秀の者を尚書御史史書令史とする。人々からの上奏文で、文字が間違っているものがあれば、これを摘発して譴責する」と。〕

この「蕭何律」は一見して、史律の史（学童）に関する部分（B）を抽出したものであることは明らかであり、史律と同根の律文を前提として考えると考えて間違いない。そして、この律文は「蕭何がつくった」ものとされるから、『漢書』が制定当初の形をそのまま記録していれば、史（学童）の部分だけでも、ほぼ同時期の史律とかなりの部分が一致するはずである。

しかし実際には、その文章はかなり簡略化され、特に「六体」の試験より以下が大幅に短縮されている。その結果、第一に「蕭何律」では、史律に見える郡府関係の記載がなくなつて、太史のみが一貫して試験の主催者となるような文章になっている。そのため、ここの史が、太史所属の史に限定されているように見える。第二に、史律では「誦課」と三年に一度の「并課」のそれぞれで最優秀者を選ぶようになっていたものが、「蕭何律」では「課の

最たる者」の一つになっていて、試験が一段階省略されている。その一方で、史律にはない、文字の不正にかかわる摘発条項が入っている。これは、「蕭何律」が『漢書』に収録されるまでに、「蕭何がつくった」という伝承は残りつつも、内容が太史中心のものに改変され、当初の内容とは異なるものになったことを意味すると思われる。

さて問題の「史書」は、史となった者が「六体」の試験を受け、その最優秀者が就任できる職名として見える。史律でこれに該当するのは、「八体」の試験の最優秀者の就く「県令史」となる。しかし「蕭何律」では、史律の二つの試験が一つに統合されて「課最者」となっている。この「尚書御史史書令史」という職名は、史律に見える手続きの一段階が省略されることによって、「県令史」と「尚書卒史」が一つにまとめられてしまったようにも見える。いずれにしても、この「史書」は、職名の一部として現われており、史律のように試験科目としては現れておらず、両者を同列に語れないことを確認しておこう。次に、もう一つの史律の内容と類似する「尉律」の記事を、「蕭何律」の記事と同様に、訳文とともに掲げておこう。

尉律、学僮十七已上始試、諷籀書九千字、⁽²⁸⁾乃得為史。又以八体試之。郡移大史、并課、冢者、以為尚書史。書或不正、輒拳効之。

〔尉律、学僮は一七歳以上になつてはじめて試験を受け、九千字以上を暗誦して書ければ史となることができる。さらに八体で（史に）試験を行う。郡は、大史に（八体の答案を）送り、（大史は）答案を総合評価し、最優秀者を尚書史とする。書が正しくなければ、これを摘発して譴責する。〕

この「尉律」の記事がいつごろの形を反映したものかはわからないが、『説文』ではこの文が「漢興」の直後に置かれ、その後に宣帝の記事が続くから、一応この間のことと考えておこう。「尉律」も「蕭何律」と同様、史律と同根の律文を前提とし、史（学僮）の部分（B）のみを抽出していることは明らかだろう。また基本的に「蕭何

「律」の内容と近似していて、二つの律文が収められる『漢書』および『説文』が成立する後漢前半期頃には、恐らくこのような規定が残っていたと考えられる。しかし、詳細に見ると両者の間にも文字の異同があるので、それを確認しておこう。

まず「尉律」では、史となった者に対する「八体」の試験には郡府も関与し、郡府での試験は大史に送られ、大史が最終的に判定することになる。この部分は史律と近い内容になっているが、前後を含めて見ると、「八体」の試験が郡府のみで行われ、大史は判定するだけの立場だったようにも読める。この原因は、史律の〔A〕の部分に相当する史となる「学僮」の所属官府に関する規定が省略されているためであろう。²⁰⁾

次に、「尉律」では「郡移大史」が「并課」と直結していて、史律でいえば「大史誦課……三歲壹」の文が欠落していることは明らかである。その結果、試験が一段階省略され、「八体」の試験の結果就任する職が「県令史」ではなく、「并課」の結果で就く「尚書史」となる。これは、史律で「并課」の最優秀者が就く「尚書卒史」と同じだと見てよく、「蕭何律」の職名よりも妥当性がある。

そして何よりも注目すべきは、ここには「史書」の語がないことである。そもそもト（学童）の部分が欠落しているのが当然なのだが、「尉律」には、試験科目としても、また職名としても、「史書」は見えないのである。もっとも、邢義田氏のように、この部分を次の「書」で区切り、「尚書史書」とみなす考えもあるが、「書」は文字不正にかかわる文として後に繋げるべきで、これはかなり無理な読み方だろう。

以上のように、「蕭何律」と「尉律」は、史律の史学童に関する部分（〔B〕）のみを摘出して、さらに史（学童）に関する部分も「八体」の試験から「并課」までの記載を、大きく省略・改変して簡略化していることになる。この内容の大幅な省略・改変は、「八体（六体）」と「并課」のそれぞれの結果によって就く地位に混乱をもたらした。この結果、史律では史学童から「風書」↓「誦課」↓「并課」という三段階の試験に合格して、史↓県令史↓尚書

卒史と昇進していくことになっていったものが、二つの文献では、「諷書」↓「八体（六体）」によって、学童（学僮）から史を経て次の職へと昇進していくという二段階の昇進過程になっている。前稿でも触れたように、恐らくこのような簡略化の過程で、「蕭何律」では錯簡ないし混乱が生じ、「尚書御史史書令史」という落ち着きの悪い職名表記となったのではなからうか。従って、従来からこの職名についてさまざまな解釈がなされているが、これをいくらか検討しても有益な解釈は得られないと考える。文献に見える「史書」の解釈が、このように混乱の結果生まれた職名を出発点として行われているのであれば、その解釈も意味をなさなくなる可能性がある。

さらに重要なのは、「蕭何律」と「尉律」では、史律で「史書」が見えるト（学童）の部分が省略されていることである。これは史律の「史書」を検討する際に、二つの文献（特に『漢書』藝文志）の内容から導きだされた「史書」の解釈を、無批判に適応することは甚だ危険だということを意味する。すなわち「史書」については、史律と二つの文献の間で、比較対照することができなくなっているのである。

小 結

本稿は、筆者の史律に対する解釈を補強するために、そこに見える「史書」が、文献に見える記載や注を根拠として理解できるかを検討した。まず、文献の「史書」に対する注は、書体説・識字書説いずれをとっても、その根拠が不明確であり、特に書体説は清朝の学者の誤解から発生している可能性を指摘した。そして文献の注には、これら以外にも、「太史書（＝太史で使用される専門書）」説や「史書（＝官府の文書）」説などもあり、文献の「史書」が必ずしも一般的理解のみではなく、多様な解釈の可能性がある。

次に、史律と類似する記載のある文献の二つの律文、すなわち「蕭何律」と「尉律」の内容を、史律の内容の分析を前提として比較検討した。その結果、史律は、史・卜・祝という祭祀関係の属吏を養成する規定だったの対

して、「蕭何律」や「尉律」はいずれも、史律の史の部分のみを抽出して、史に特化した規定になっている。これによって、史律と「蕭何律」・「尉律」とは、性格を異にする規定になっているといえる。しかも、「蕭何律」と「尉律」には内容の省略・混乱があり、特に「蕭何律」に見える「史書」に関する部分は、記事の混乱の結果生じたもので、そこからは「史書」の内容を判断できないことを指摘した。そもそも文献に見える二つの律文では、史律で「史書」が見えるト（学童）に関する部分が欠落しているので、「史書」についての検討を、史律と二つの律文とを関連付けてはできないのである。

さらにもう一つ、史律に関する以前の筆者の考えを補強するとともに、そこに見える「史書」は、書籍の形態をとるトとしての専門知識を得るための教科書の一つであり、その内容は、『漢書』藝文志の「術数」類に属するものではないかと推測した。「史書」の内容については、さらに検討する余地があるが、以上が本稿で検討した結果である。

ところで、「蕭何律」や「尉律」を史律と対照してみると、これらが本当に書記官一般としての史の養成にかかわる規定なのかという疑問が湧く。これまで見てきたように、律文の簡略化によって、「蕭何律」は太史の史、一方「尉律」は郡府の史を、それぞれ中心の対象とする内容になっている。そうすると「尉律」は、郡府を対象としているから、書記官としての史に関するものだといえるかもしれないが、「蕭何律」は太史という特定の官府のみを対象としているのだから、これを書記官一般にまで拡大できるだろうかという不安も湧いてくる。これまで、書記官一般を規定したと考えられてきた律文が、必ずしもそのような内容ではない可能性があるのである。史律はもちろんのこと、「蕭何律」や「尉律」についても、一旦、小学（文字学）や識字教育という角度からの分析を離れて、さらに検討していかなければならないだろう。

以上のように、「史書」の解釈の出発点となる文献の記載や注の解釈からは、史律の「史書」を分析できないこ

とが明らかとなった。そこで次は、漢代史料に散見される個別の「史書」の例を検討し、そこに史律の「史書」との共通性があるか否かを確認する必要がある。ここには、「史書」についての多様な解釈の余地が残されていると期待されるからである。この点については、稿を改めて検討したい。

註

(1) 本稿で引用する張家山漢簡の釈文は、張家山二四七号漢墓竹簡整理小組編『張家山漢墓竹簡(二四七号墓)』(文物出版社、二〇〇一年)を基本としつつ、次のような注釈・訳注類も参照して修正している。

- ・早稻田大学簡帛研究会「江陵張家山二四七号漢墓竹簡訳注(二) 賊律訳注(2)・史律訳注(1)」(『長江流域文化研究所年報』二、二〇〇三年)
 - ・朱紅林『張家山漢簡《二年律令》集釈』(社会科学文献出版社、二〇〇五年)
 - ・張家山二四七号漢墓竹簡整理小組編『張家山漢墓竹簡(二四七号墓)(修訂本)』(文物出版社、二〇〇六年)
 - ・富谷至編『江陵張家山二四七号墓出土漢律令の研究訳注篇』(朋友書店、二〇〇六年)
 - ・彭浩・陳偉・王藤元男主編『二年律令与奏讞書——張家山二四七号漢墓出土法律文獻釈読』(上海古籍出版社、二〇〇七年)
 - ・専修大学『二年律令』研究会『張家山漢簡』『二年律令』訳注(1)——秩律・史律——(『専修史学』四五、二〇〇八年)
- (2) 筆者の参照した史律に関する研究は、次の通り。末尾に◎を付けた研究は、従来の観点から「史書」を分析しているものである。
- ・李学勤「試説張家山簡《史律》」(『文物』二〇〇二(4)◎)
 - ・曹旅寧「秦漢史律考」(同『秦律新探』所収、中国社会科学出版社、二〇〇二年)
 - ・王学雷「《二年律令・史律》的性質及「史書」」(『中国書画』二〇〇四—二、二〇〇四年)◎
 - ・汪桂海「漢代的「史書」」(『文博』二〇〇四—二、二〇〇四年。のち同『秦漢簡牘探研』所収、天津出版社、二〇〇九年)◎
 - ・朱紅林「張家山漢簡中所見勞績制度」(『考古与文物』二〇〇四年増刊、二〇〇四年。のち改題して同『張家山漢簡《二年律令》研究』所収、黒龍江人民出版社、二〇〇八年)
 - ・謝光輝・徐学標「兩漢「史書」名実考辨」(『古籍整理研究学刊』二〇〇五—五、二〇〇五年)◎
 - ・広瀬薫雄「《二年律令・史律》札記」(『楚地簡帛思想

- 研究』二、湖北教育出版社、二〇〇五年)
- ・広瀬薫雄「張家山漢簡所謂『史律』中有関踐更之規定探討」(『人文論叢』二〇〇四年卷、二〇〇五年)
- ・張伯元「読『二年律令』札記」(同『出土法律文献研究』商務印書館、二〇〇五年)
- ・趙平安「新出『史律』与『史籀篇』の性格」(『華学』八、二〇〇六年)◎
- ・劉濤「長沙東牌樓東漢的書体・書法与書写者―兼論漢朝課吏之法・『史書』与『八体六書』(長沙市文物考古所・中国文物研究所『長沙東牌樓東漢簡牘』文物出版社、二〇〇六年)◎
- ・黃人二「説張家山漢簡史律書後」(同『出土文献論文集』所収、高文出版社、二〇〇五年)◎
- ・王子今「張家山漢簡『二年律令・史律』『学董』小議」(『文博』六、二〇〇七年)
- ・王元軍「官文書制度及其对于書写的約定」(同『漢代書刻文化研究』所収、上海書画出版社、二〇〇七年)◎
- ・林素清「『二年律令与奏讞書・史律』読後」(二〇〇八年国際簡帛論壇〔シカゴ大学〕の発表資料、二〇〇八年)◎
- ・葉山「卒・史与女性：戦国秦漢時期下層社会的読写能力」(『簡帛』三、二〇〇八年)
- ・臧知非「『史律』新証」(『史学月刊』二〇〇八一、二〇〇八年)
- ・邢義田「漢代『蒼頡』・『急就』・八体和『史書』問題

張家山漢簡・史律に見える「史書」について

- ―秦漢官吏如何学習文字」(愛媛大学「資料学」研究会編『資料学の方法を考える』(8)―情報発信と受容の視点から―愛媛大学文学部、二〇〇九年)◎
- ・張伝官「論建国以来出土文献中的教育史資料」(『史林』二〇〇九一四、二〇〇九年)
- ・大西克也「秦漢楚地隸書及関於『史書』的考察」(『シンポジウム』(2)戦国秦漢出土文字資料と地域性―漢字文化圏の時空と構造、二〇〇九年九月一九日、於：日本女子大学)◎
- ・彭浩「談張家山漢簡『史律』的『上計六更』」(『出土文献研究』九、二〇一〇年)
- 〔日本語〕
- ・高村武幸「漢代の官吏任用と文字の知識」(同『漢代の地方官吏と地域社会』所収、汲古書院、二〇〇八年、二〇〇六年初出)◎
- ・富谷至「書体・書法・書芸術―行政文書が生み出した書芸術」(同『文書行政の漢帝国 木簡・竹簡の時代』所収、名古屋大学出版会、二〇一〇年、二〇〇九年初出)◎
- ・宮宅潔「秦漢時代の文字と識字」(富谷至編『漢字の中国文化』昭和堂、二〇〇九年)
- ・エノ・ギョーレ「古代の識字能力を如何に判定するのか―漢代行政文書的事例研究―」(高田時雄編『漢字文化三千年』臨川書店、二〇〇九年)
- ・富谷至「書記官への道―漢代下級役人の文字習得」(同『文書行政の漢帝国 木簡・竹簡の時代』所収、

- (3) 名古屋大学出版会、二〇一〇年。二〇〇九年初出
- ・広瀬薫雄「張家山漢簡『二年律令』史律研究」(同『秦漢律令研究』所収、汲古書院、二〇一〇年)
 - ・史律公表前、あるいは史律公表後でも史律に触れずに「史書」書体説をとる研究は次の通り。

・勞榦「漢代的「史書」与「尺牘」」(『大陸雜誌』二二—二、一九六〇年)

・阿辻哲次「史書」と「史篇」(『人文論集』(静岡大学文学部社会科学・人文学科研究報告) 三三、一九八二年)

・富谷至「『史書』考」(『西北大学学報』(哲学社会科学版) 一九八三—、一九八三年)

・張金光「論漢代的学吏制度」(『文史哲』一九八四—、一九八四年。のち他の論文と合併して同『秦制研究』所収、上海古籍出版社、二〇〇四年)

・于豪亮「居延漢簡叢釈」(同『于豪亮學術文存』中華書局、一九八五年)

・杻山明「削衣・觚・史書」(汪濤・胡平生・吳芳思編『英国国家図書館藏斯坦因所獲未刊漢文簡牘』上海辭書出版社、二〇〇七年)

- (4) 注(2)前掲の研究の中で、末尾に◎印を付けたもの。
(5) 拙稿「張家山漢簡「史律」に見える任用規定について」(『文学部論集』(佛教大学文学部) 九三、二〇〇九年)

- (6) 例えば注(2)前掲の曹「張家山漢簡《史律》考」が、この点を明確に指摘する。

- (7) 「史書」官府文書説をとるのは、次の通り。

・汪桂海「官文書及其程式(一)」(同『漢代官文書制度』所収、広西教育出版社、一九九九年)

・于振波「史書」本義考」(『北大史学』六、一九九九年)

・徐剛「史書」考」(『燕京学報』新二六、二〇〇四年) なお汪氏は後に、注(2)前掲「漢代的「史書」」において、ここに掲げた論文を踏襲しつつも、「史書」書体説に傾いているようである。

- (8) 注(2)前掲の臧「史律」新証」

- (9) 注(7)前掲の汪「官文書及其程式(一)」、注(2)前掲の汪「漢代的「史書」」。また注(3)前掲の富谷「史書」考」、注(2)前掲の富谷「書体・書法・書芸術」などにも指摘がある。

- (10) 「説文解字注」卷一五上・序で段玉裁は、「及宣王太史……」の部分で「凡漢書元帝紀……、或云善史書、或云能史書、皆謂便習隸書、適於時用。猶今人之工楷書耳。而自応仲遠注已云、史書、周宣王太史籀所作太篆十五篇也、殊為繆解」といい、さらに「尉律」の「尚書史」の部分で「(藝文志)云史書令史者、能史書之令史也。漢人謂隸書為史書。……史皆云善史書。大致皆謂適於時用。如貢禹伝云、……。又蘇林引胡公云、……。是可以知、史書之必為隸書。向來注家釈史書為太篆、其繆可知矣」と注する。

なお錢大昕『三史拾遺』卷二は本文に引いた文に続いて、さらに「……諸所稱善史書者、無過諸王后妃嬪侍之

流、略知隸楷、已足成名、非真精通篆籀也。魏志・管寧伝、潁川胡昭、善史書、……。則史書之即隸書、明矣」とも述べる。

(11) 『後漢書』紀五安帝紀の李賢注は「史書者、周宣王太史籀所作之書也。凡五十五篇、可以教童幼」とする。ここでは篇数を「五十五篇」とするが、「十五篇」の誤りだろう。

(12) 応劭は恐らく本文で述べたような理解で、「史書」＝『史籀篇』を考えたのだろう。応劭が生きた後漢末には、『史籀篇』は難解な書物として存在していた。彼自身が著した『漢官儀』（『通典』巻二二職官部所引）には、「能通蒼頡・史籀篇、補蘭台令史。滿歲、補尚書令史。滿歲、為尚書郎」と記され、『蒼頡篇』や『史籀篇』に通ずることによって属史に採用され、郎官へと昇進する規定があった。ここに掲げられる『史籀篇』はもちろんのこと、前漢初期に作られた『蒼頡篇』も、前漢後半期には特殊な能力がないと読めないほど難解な識字書として、小学（文字学）の対象になっていた（『漢書』藝文志および『説文』序）。そうすると、後漢末にはこの二書を読みこなせるのは、小学に関する特殊な能力を持った者だけだったであろう。従って、『漢官儀』の記事は、単に文字が読み書きできるというのではなく、難解の書物を読みこなす特殊技能を備えた者を、蘭台令史に採用しようとする規定だと考えられる。

応劭の当時、すでに「尉律」＝「蕭何律」は行われなくなっていた（『説文』序）が、『漢官儀』の規定の中にそ

れとの継承関係を見出したとしたら、蘭台令史を「蕭何律」の「尚書御史史書令史」との関係で考えることもあり得るだろう。すなわち「史書令史」とは、「史書」＝『史籀篇』＝『大篆』に通じた令史だったと考えられるのである。「尉律」＝「蕭何律」が機能しただろう前漢初期、『蒼頡篇』は編纂されたばかりで難解とまではいえなかっただろうが、古くから存在した『史籀篇』＝『大篆』は、読みにくいものになっており、そういうものを読みこなす特殊技能を持った者を「史書令史」と呼んだと、応劭が考えた可能性が高い。このように考えると、応劭が「尉律」＝「蕭何律」を『漢官儀』のような内容の規定だったと考えたとしたら、前漢初期の権威ある書は『史籀篇』＝「史書」を指してほかはなく、これを読みこなせる役人として、「蕭何律」の「尚書御史史書令史」をとらえた可能性もある。

(13) 注(8)前掲の臧論文、二四頁参照。

(14) 『資治通鑑』卷二七の「習事」について、胡三省は「内習漢事、外習西域諸国事也」と注する。

(15) 「大史誦課」の「誦」について、『二年律令与奏讞書』は「疑「誦」為「通」形近之誤。通、共、同。……簡文「大史通課之」、指由大史对各郡送来的「八体課」一同評判」とする。本稿では、この解釈に従って、この文を訳している。

(16) 当初「徴」と釈読されていた「卜書」の前の文字は、『修訂本』以来、「誦」字に解釈されるようになっていく。占いの回数についても、当初「九筭中七」とされて

いたのが、『修訂本』以来、「六発中一」とされるようになっていた。そして「官佐」については、当初「官廼(?)」とされていたものを、『修訂本』が「佐」の可能性を指摘し、『二年律令与奏讞書』が赤外線映像によって判断したのによる。

なお前条〔B〕と本条〔C〕の「諷書」の「諷」、および本条と次条〔D〕の「誦」については、注〔1〕に掲げた早稲田大学簡帛研究会の「訳注」に従い、『周礼』春官・大司楽「以樂語教国子興・道・諷・誦・言・語」の鄭注に「興者、以善物喻善事。道、読曰導。導者、言古以訓今也。倍文曰諷。以声節之曰誦。発端曰言。答述曰語」とあることによって、「諷」は暗誦、「誦」は節をつけて声を出すことと解釈する。本文に掲げた訳では、訳文が長くなるので「誦」をそのまま「誦む」としているが、その意味はここに示した「節をつけて声を出す」と考えている。

ちなみに、広瀬氏は「誦ト書三千字」について「得ト書三千字」とする(注〔2〕前掲の広瀬『二年律令・史律』札記)および「張家山漢簡『二年律令・史律研究』」が、ここで切るとかなり読みにくくなると思われるので、本稿では採用しない。

(17) 「上計六更」に関して最近、注〔2〕前掲の彭浩「談張家山漢簡《史律》的『上計六更』」が出た。そこではこの部分を「其能誦三万以上、以為〔脩法〕。ト上計六更缺、試脩法」と文字を補って独特の読み方をするが、これでは「ト上計六更」がどこから出てくるのかよくわか

らず、また「上計」についての十分な論証がないことなどから、本稿では採用しない。

(18) 「冗」については、「更」との関係で、恒常的に職を与えられて食料も支給されることを「冗」と見る広瀬氏の見解がある(注〔2〕前掲の広瀬「張家山漢簡所謂《史律》中有関踐更之規定探討」および「張家山漢簡『二年律令・史律研究』」)。

(19) 「ト書」については、『論衡』骨相篇に「相者曰、今此婦人不富貴、ト書不用也」とあり、また『説文』卷九上・頁部に「類、低頭也、从頁逃省。大史ト書、類仰字如此。楊雄曰、人面類」とある。『論衡』の記事は、『漢書』卷八九循吏伝の黄霸伝に同じ記事があり、ここでは「ト書」が「相書」になっているが、占いと関係がありそうである。また後者の『説文』の記事も、段玉裁らはト筮との関係で考えていて、「ト書」は「史書」ほど不安定ではなさそうである。ちなみに『説文』では、「大史ト書」となっているが、これは大トが大史に併合された後漢時代の状況を反映しているのではないか。

「ト書」については、注〔2〕前掲の林素清「《二年律令与奏讞書・史律》読後」を参照。

(20) 注〔2〕前掲の李学勤「試説張家山簡《史律》」以来、この解釈が一般的になっているようである。

(21) ちなみに、史が昇進する際に課される「八体」も、「蕭何律」(『漢書』藝文志)の「六体」や「尉律」(『説文』序)の「八体」との関連から、それが書体を意味すると解釈される。しかし文献の記事を離れると、それが

試験科目であることはわかるものの、その内容がどのようなものだったのかは、史律の文章からは判明しない。そもそも「十五篇」が、史学童が史となる際に課されるものだったのに対して、「八体」は史となった者が昇進する際に課されるものであり、両者の関係は不明確であるが、試験科目としては次元の異なるものだったのである。この点については、邢義田氏が詳細に論じている(注②)前掲の邢「漢代《蒼頡》・《急就》・八体和「史書」問題」が、その他の研究では、この次元の違いがあまり意識されていないように思える。

(22) 史(学童)には郡府所属のものも存在するが、彼らも史となつてからの昇進試験は、大史の管轄下で行われるから(B)、その職掌も大史所属の史と変わらなかったと考えられる。少なくとも、史律で扱われている史は、郡府のそれも含めて書記官ではないと考えられる。

(23) 後漢時代のものであるが、『続漢書』志二五・百官志二に次のようにある。まず太史は「太史令一人、六百石。本注曰、掌天時・星曆。凡歲將終、奏新年曆。凡国祭祀・喪・娶之事、掌奏良日及時節禁忌。凡国有瑞應・災異、掌記之」と記されるが、太常の属官を述べた最後に「有太卜令、六百石、後省并太史」とあるように、後漢の太史には太卜の職掌も含まれる。また太祝は「太祝令一人、六百石。本注曰、凡国祭祀、掌祝祝、及迎送神」と記される。なお太卜については、後の史料になるが『唐六典』卷一四に「太卜令掌卜筮之法、以占邦家動用之事」などと見える。

(24) 識字書の内容について、注(2)前掲の富谷「書記官への道」が指摘するように、専門官としての特殊用語を学習するものも含むという発想も可能だろうが、本稿では採用しない。

(25) 術数学についての基本的考え方は、次のような研究を参照した。

- ・木村英一「術数学の概念とその地位」(『東洋の文化と社会』一、一九五〇年)
- ・川原秀城「術数学—中国の「計量的」科学」(『中国—社会と文化』八、一九九三年)
- ・中村璋八「中国思想史上における術数」(『東洋の思想と宗教』一四、一九九七年)
- ・保科季子「漢代における「道術」の展開—經学・識緯・術数—」(『史林』八三—五、二〇〇〇年)
- ・馬場理恵子「術数」の概念の成立と漢代学術」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学篇』三、二〇〇四年)

なお馬場氏によれば、「術数」は史関係と卜関係の二種類に分かれ、祝関係はここには入らないようである。この点については、改めて検討したい。

また秦漢時代の官吏たちと術数との関係については、林劍鳴「秦漢政治生活中的神秘主義」(『歴史研究』一九九一—四、一九九一年)も参照。

(26) 墓主の地位については、張家山漢墓竹簡整理小組「江陵張家山漢簡概述」(『文物』一九八五—一)などを参照。
(27) 「蕭何律」では、諷書の字数が「九千字」、史となつて

からの試験が「六体」となっており、史律の記載と異なるが、本稿では、次の「尉律」の同箇所の記事も含めて、この部分の史律との相違については問題にしない。

(28) この「籀」字についても種々議論があるが、史律と対照する限り、この字は衍字だと考えるのが妥当だろう。

(29) 「尉律」では、史律の〔A〕に相当する部分が、「学僮十七已上始試」として、年齢に関する記載が正確な形で残る以外は省略される。一方「蕭何律」ではすべて省

略される。その結果、文献に残る二つの律文では、就学年齢・学習期間・卒業試験の場所などが、不明かまたは不明確になっている。

(30) 注(2)前掲の邢「漢代《蒼頡》・《急就》・八体和「史書」問題」九二頁参照。